

☆☆『歌われなかった海賊へ』 遠坂冬馬

衝撃のデビュー作『同志少女よ、敵を撃て』が本屋大賞やら高校生直木賞やらを受賞した著者の待望の第二作目！これがまたすばらしい！今年度のベストはもう決まりです！「十五歳から十八歳の青少年がヒトラー・ユーゲントに加入することは義務であり、同時に、ヒトラー・ユーゲントを除く『少年団』は、その存在自体がすべて違法である」。そんなヒトラー・ユーゲントに真っ向から対立した、少年たちによる「エーデルヴァイス海賊団」の物語。「私たちは、ドイツを単色のペンキで塗りつぶそうとする連中にそれをさせない。黒も、赤も、紫も黄色も、もちろんピンクの色もぶちまける。私たちは、単色を成立させない、色とりどりの汚れだよ」。1944年、ヒトラーによるナチ体制下のドイツ。ゲシュタポに逮捕され、死刑に処された父親の敵を討つため、密告者である仇敵をナイフで刺し殺そうとしていた十六歳のヴェルナーは、ハーモニカのメロディに阻止される。メロディの主は少女で、ヴェルナーのことを知っており、彼に会いたがっている奴がいることと自分の名前をエルフレデだと告げて去った。翌日、約束の場所に行くと、裕福な資本家の息子、レオンハルトがいて、彼らはヴェルナーをエーデルヴァイス海賊団にスカウトするのだった。メンバーはこの3人だけ。「ナチなんてクソであり、そう思う自分たちはここにいる。それを示したい」という思いをともにしている3人だ。鉄道敷設の工事に従事していたヴェルナーは、ヒトラー・ユーゲントの若者たちが百人以上、戦争捕虜が四、五十人も駆り出されたこの工事を不審に思っていた。空襲警報の隙に事務所で地図を見ると、終着駅の先をさらにレールが延びていて高射砲や鉄条網や地雷で守られていた。何があるのか。エーデルヴァイス海賊団は、それを見届けるためにレールの先を歩くことにした。はたして、操車場だと説明されていたそこは、強制収容所だった。人が満載された貨物列車から、次々と人が降りてくる。「貨物車両から、囚人服を着せられた人たちが降りる、降りる、降りる…降り続ける、いつまでも」。遺体を運ぶ人たちが向かう先に、煙突から煙がもうもうと立ち上がっている窓のない大きな施設があった。彼らは人が燃やされる臭いを嗅いでいたのだ。ナチが行う「究極の悪」を目にした彼らのとった行動とは!?

☆『幽玄F』 佐藤 究^{きわむ}

中南米の邪神を描いた『テスカトリボカ』で強烈な印象を残し、直木賞と山本周五郎賞をW受賞したあとの第一作は、三島由紀夫と戦闘機へのオマージュ。主人公の名前は、なんとミシマの遺作「豊穰の海」最終巻の『天人五衰』に出てくる「安永透^{やすながとおる}。ミシマが超音速戦闘機に搭乗した体験記「F104」を爆発させたような内容です。安永透は、飛行機が大好きな少年だった。小学生のころは、空にジェット旅客機を見つけるや、追いかけて走った。高校生になると、同好の友達ができ、いままで知らずにいた飛行機についてのたくさんの知識を彼から得た。青森県にある航空自衛隊三沢基地の航空祭について知ったのも、彼からだった。「傍若無人な戦闘機に切り裂かれる空」。透は、そこで初めて戦闘機F-16が間近に飛ぶ姿を目の当たりにする。「そのとき透は、自分がなんのために生まれてきたのかを知った」。透は航空自衛隊のパイロットになると決意するのだった。とてつもない難関をくぐり抜け、航空学生試験に一発合格した透は、志願者のうちわずか1%しか残れないF-15のパイロットになった。自衛隊のトップ・パイロットになった彼は、26歳でさらに最新鋭のF-35に搭乗するようになり、その天才ぶりを遺憾なく発揮するようになる。「ただ私は戦闘機という機械に乗りたかっただけで、その戦闘機の飛ぶ空が<護国の空>だったのです」。彼はたいへん優秀なパイロットだったが、英雄になりたいわけでもなく、「護国」の精神とは無縁だった…。

『君が手にするはずだった黄金について』 小川 哲^{さとし}

で、こちらも直木賞（山田風太郎賞とW）受賞後第一作！『地図と拳』では満州、『ゲームの王国』ではカンボジアを舞台に大きな大きな物語を生み出した著者ですが、今作では身の回りのことしか書かれていません。なんと言っても、今作の主人公は著者自身なのですから。東京大学大学院生の僕は、就活でもしよと新潮社のエントリーシートを取り寄せたものの、〈あなたの人生を円グラフで表現してください〉との質問に手が止まってしまう、小説を書くことになります。書かれた小説には、「フェイク」が登場します。たとえば、表題作。高校の同級生の片桐。口だけの片桐。東大に行って起業すると豪語していたが、東大どころか滑る止めもすべて落ちて浪人し、一浪してもやはり東大に落ち、地方の私大へと入学した。在学中に怪しい商売に手を出し、ぱっとしない就職をしたが、そこを辞め独立してトレーダーに。そんな片桐がいまや80億円を運用して六本木のタワマンで暮らす有名投資家になったのだという…。

『葬式同窓会』 乾 ルカ

母校である北海道立白麗高校で非常勤の司書教諭をしている優奈は3年6組のときの担任だった水野先生が亡くなったことを聞いて驚く。古文漢文の水野。スポーツマンらしい体躯に、色黒で精悍な顔つき。陸上部の顧問をしていて、男子生徒の兄貴分みたいな立ち位置の教師だった。その水野が…。通夜はまるで同窓会のようなようだった。同窓会は卒業後十年目に予定されており、公にクラスメイトが集まることはいままでもなかったのだ。居酒屋に移動して、お約束のマウントの取り合いのあと、思い出話に花が咲いた。クラスでいちばん目立っていた望月が、みんなを騒ぎに巻き込んで優奈の親友の彩海に昼休み告白スポットの噴水の前で告ろうとしたところ、まったく同じ場所の同日同時間に恋愛に興味のない一木に1年生の女の子が告白して玉砕した告白ブッキング事件。そういえば、その日の2時間目には、もう一つ水野先生に関わる事件があった。いつもは温厚な水野が授業を始めようとしたときにくしゃみをした船守が、目の敵にされたのだ。初めて学ぶ漢文の返り点も送り仮名もない白文を何の教えもなしにいきなり読めという無理ゲー。間違えるたびに船守は指示棒で殴打された。何回も、何回も。いまならハラスメントで訴えられることは確実のひどい仕打ちだった。船守はそれ以来、学校に来なくなってしまった。なぜ水野はあの日のあのときだけ船守に対して怒り狂っていたのだろうか…。

『水底のスピカ』 乾 ルカ

「転校してきたときから一貫して、美令は何をせずとも目立っていた。ただそこにいるだけで、彼女は周囲を負かしてしまう。あの子に比べたら他の女の子は冴えないね、の冴えない側に、問答無用で組み込まれる理不尽」。夏休み明けの北海道立白麗高校2年8組に、異変が起きた。東京からやってきた転校生のおかげで。汐谷美令。容姿端麗にして頭脳明晰。完璧な彼女は学校中から注目を集めるが、クラスの上位カーストの女子に「ここから海へはどう行くの?」と尋ねたせいで(札幌に海はない)、「東京の人」認定され存在を完全無視されるような存在になってしまった。孤独ではなく孤高。モブでいることがイヤでクラスでひとりでいた和奈は、孤立した彼女と学園祭の仕事でペアを組むのに手を上げ、友達になる。美令は男子生徒に自転車を借りて、毎週木曜には遠く離れた海までひとりで行くのがあった。「私、神様の見張り番をしているの」。そして、スマホのアプリで家にいる神様を監視しているのだそう。和奈は美令の秘密を理解したいと思うが…。恋バナだけではない珠玉の青春小説!

『アボガドの種』 ^{たわら まち} 俵 万智

「言葉から言葉つむがず テーブルにアボガドの種 芽吹くのを待つ」第一歌集『サラダ記念日』で国民的歌手となった著者の、
遼空賞&詩歌文学賞受賞の前作に続く第七歌集。「言葉から言葉
をつむぐだけなら、たとえばAIにだってできるだろう。心から
言葉をつむぐとき、歌は命を持つのだとを感じる」。コロナ期、
朝ドラ「舞いあがれ!」、入院を含んだ4年間の集大成。「ウク
ライナ今日は曇りというように戦況を聞く霜月の朝」「関係を分
類できず見上げれば名前を持たぬ星がまたたく」「二人がけの席
に二人で座るときどんな二人に見えるのだろうか」「はちみつの一
ような言葉を注がれて深夜わたしは幸せな壺」「デジタルの時代に
恋は進化せず『心はそばに』という合言葉」「『バッチグー』と
息子にLINE送りしが『死語はつつしむように』言われる」「ベ
ランダで見るときよりも窓枠を額縁にした月が明るい」「優しさ
にひとつ気がつく ×でなく○で必ず終わる日本語」「言葉とは
心の翼と思うときことばのこぼこのこぼとをとばす」

『下剋上球児 三重県白山高校、甲子園までのミラクル』

菊池高弘

鈴木亮平主演で話題のTVドラマのもとになったノンフィクシ
ョン! いわゆる野球エリート校とは真逆、10年連続、県大会
初戦敗退の弱小校で、かつて県内で一番対戦したくないとまで
言われた“荒れた高校”が、まさかの甲子園出場のミラクルを
成し遂げるまで。初任の高校の4年目にベスト4という結果を
残した東は、異動先を告げる校長に「東くん、すまん。キミの
野球人生を終わらせてしまった…」と謝られた。異動先は、悪
名高き白山高校だった。ただ野球が弱いだけでなく、ヤンキー
ばかりで授業が成り立たない教育困難校。白山の90%は帰宅
部で、運動神経のいい生徒は運動部には入らず、運動部に入っ
ているのは目立たない真面目な生徒ばかりだった。雑草が伸び
放題でホームベースが土中に埋もれているグラウンドで、東は
「ここから甲子園に行こうや!」と5人しかいない部員に発破
をかけた。まずやるべきはグラウンドの整備だった…。

————— まだまだ元気に咲いている十一月の紫陽花 (!) に遠慮しながら、
ポインセチアとプリンセチアを図書館に飾りました。青いポインセチアを見かけて
ビックリしたのですが、これは青く染められているのだそうです。

ランウォーク大会では、せーやさんはゴールでみなさんをお迎えします♪
がんばってね! では、図書館で。